

会 議 記 録

会議名称	第4回 杉並区基本構想審議会 第3部会
日 時	平成23年5月27日（金）午後3時00分～午後5時00分
場 所	中棟4階 第1委員会室
出席者	委員 池田、三輪、今井、佐藤、手塚、若林、小川 区側 教育委員会事務局次長、子ども家庭担当部長、企画課長、 区民生活部管理課長、文化・交流課長、子育て支援課長、保育課長、 庶務課長、社会教育スポーツ課長、済美教育センター副所長、 児童青少年課長、子供園担当課長、子供園担当副参事
配付資料	資料1 「第3部会」主な意見等の整理（第1回～第3回） 資料2 主な子ども・子育て支援施策の一覧 資料3 区の保育施設に関する資料 資料4 杉並区立子供園～区独自の幼保一元化の取組～ 資料5 児童館事業に関する資料 資料6 児童虐待の取組等に関する資料 資料7 子育てを地域で支える仕組みづくりの推進 資料8 地域で子ども・子育てを支える施設配置・サービスの今後のあり方（イメージ図） 行政資料 ・児童館あんない ・子ども家庭支援センター事業案内 ・子育てサイト案内 ・すぎなみ地域大学募集案内（22年度後期、23年度前期）
会議次第	1 開会 2 議事 （1）検討テーマに沿った個別検討について ①子育ち・子育て ②地域の子育て力 （2）議論のまとめ 3 その他 4 閉会

○副部会長 本日はお忙しい中お集まりいただきましてありがとうございます。これより、第4回杉並区基本構想審議会の第3部会を開催いたします。

本日は部会長が、今回のテーマに関しまして、ご自身のご専門のお立場でお話をされるということですので、副部会長である私が司会をさせていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

異論はありませんでしょうか。よろしいでしょうか。

本日の部会では、テーマである「すべての子どもへの切れ目のない成長・学びの支援」ということのうち、前回は学齢期以降でしたので、今回は子育て・子育てに焦点を当てることといたします。それとあわせて、これは前回と同じなんですけど、地域の子育て力に関して議論をしていきたいと思っていますので、よろしくお願いいたします。

議事に入ります前に、事務局の方で1回目から3回目までの委員の皆さんの主な意見を整理していただいていますので、その資料の説明をお願いいたします。

○企画課長 この部会の主な意見等の整理ということで、この部会の検討テーマをまとめていただいた資料をもとにしまして、それぞれ「子育て・子育て」、「学齢期以降」、そして「地域」の力のカテゴリーに合わせて、これまでの3回にわたる主なご意見を記載してございます。

主な意見は、網掛けのない白抜きの部分に白丸で、それぞれ記載をさせていただきました。本日は、「子育て・子育て」、それと「地域の子育て力」というテーマということでございますけれども、さらにご意見をお出しいただき、これに加えるような形でまた整理をしていければと思っています。

なお、この資料の一番上、「どんな杉並区民に育ててほしいか」という部分でございますが、ここにつきましては、最終的に、この部会の、目標としておまとめいただければありがたいと思っていますけれども、本日のこの時点では、これまでの議論で出されたキーワードを参考にお示ししてございますので、今後の議論の、ぜひ参考にとというふうに思っています。以上でございます。

○副部会長 はい。ご説明、ありがとうございました。

少し黒くなっている部分が、前回までにA4で配付した資料の中で書かれていることで、白い部分は1回目から3回目までの議論のポイントをまとめて、ホワイトボードなどにまとめてあるキーワードなども、ここに入っているということになります。

子育て・子育てのところは空欄があいておりますが、このままでいいというわけではなくて、今日の議論の中で、どんどんここを埋めていくという形になりますし、今日の最後になるかどうか、あるいは次回になるかもしれませんが、一番上の「10年後のあるべき姿・目標（どんな杉並区民に育ってほしいか）」というところが第3部会の全体を代表するような言葉としてまとめることができるということをお願いしたいと思います。

以上のような整理でよろしいでしょうか。ありがとうございます。

それでは、これより議事に入ります。

初めに、議事に関して、本日配付しました資料につきまして、事務局より説明をお願いしたいと思います。

○子育て支援課長 子育て支援課長でございます。それでは、ご説明申し上げたいと思います。

資料2から資料8までございます。それからパンフレットとして、児童館あんない、子ども家庭支援センターのご案内、すぎなみ子育てサイトのリーフレット、最後にすぎなみ地域大学の22年度後期の募集、23年度の前期の募集がございます。そのほか、今回、開催に当たりまして、子ども・子育て行動計画の方をご持参いただくよう、お願いさせていただいたところでございますが、もしお手元にございませんでしたら、お申しつけいただければと存じます。

それでは、早速でございますが資料の説明に入らせていただきます。

まず、資料の2、主な子ども・子育て支援施策の一覧でございますが、こちらは、今回のテーマである子育て・子育て、地域の子育て力に関しまして、主な施策を一覧にまとめたものでございます。

年齢軸と、それから施策の累計でまとめたものでございますが、まず上の部分、教育・保育・放課後児童対策、こちらは施設へのサービス、それから

特定の対象者を持つサービスということで記載しています。その次が、特別なニーズを持たれる方への支援内容。最後にすべての子育て家庭への支援内容ということで、この中は、経済的支援、母子保健、子育て支援サービス、地域の基盤づくり、四つの項目に分けて、まとめたものでございます。これらの施策に基づきまして、総合的に子ども・子育て支援施策を進めているということの基礎資料でございます。

続きまして、資料3をごらんください。こちらは、保育関係のうち、認可申込数、保育定員、待機児童数をまとめたものでございます。

平成15年度以降、保育施設の充実を図ってまいりまして、待機児童の減少が見られたところでございますが、19年6月ごろから、区の就学前人口が増加傾向に転じております。さらに平成20年秋、リーマンショックがございまして、経済状況の悪化が背景にあり、女性の就労意向の高まり、こういったことでございまして、保育施設の整備を上回る保育需要の急増という状況が発生してまいりました。緊急対策を講じたことで22年度は待機児童減少いたしました、ある意味これが呼び水になる形で、23年度は再び上昇しております。今後、こういった形で保育の待機児童対策を進めていくか、大きな課題となっております。

1枚おめくりください。資料3-2でございます。こちら、民間主体も含めた保育施設の現状でございます。各施設の定員の総計、認可保育の関係ですと5,299人、認可幼稚園156人、認可外の保育施設1,168人となっております。このうち、網掛けの部分が区の直営施設となっております。今後の保育サービスの拡充につきましては、行政と民間の役割分担をどのように考えながら進めていくのかといった点も課題になるかと認識しております。

1枚おめくりください。資料3-3、このように、官民を含めての対策を進めておるところでございますが、0歳から5歳までのお子さんの居場所、就園状況をまとめますと、こちらようになります。

幼稚園が約3割。保育園が3割。残る4割が在宅といった状況となっております。

続きまして、資料4をお願いいたします。就学前施設につきましては、幼稚

園それから保育園の機能統合、これを目指していきます幼保一体化が大きなテーマとなっております。杉並区におきましても、国の子供園とは別に、区独自の幼保一体化の取り組みを進めております。この資料の概要、上の部分の二つ目の黒丸の部分でございますが、幼児の健やかな育成を図るため、保護者の就労形態にかかわらず幼児を受け入れる子供園、これを区立幼稚園を発展的に転換していくことで進めております。

特色といたしましては、やはり幼保の一体化施設でございますので、幼稚園教諭・保育士の連携、それから国の指針等も踏まえ作成しました「育成プログラム」に基づく就学前の教育・保育を実施しております。その際、小学校との円滑な接続、これを視野に幼保小の連携活動などを進めているといったところに特色がございます。

これまでの区立幼稚園6園のうち、22年度に2園、それから23年度に2園が転換しておりますが、残る2園につきましても先行園の検証も踏まえ、今年の秋には方針を定めて、取り組みを進めることとしております。

続きまして、資料5、児童館関係についてご説明させていただきます。

児童館は0歳から18歳まで、児童・生徒を対象とします。児童福祉法で申し上げますと児童厚生施設に当たりますが、児童に健全な遊びを提供する、健康の増進を図る、情操を豊かにするといった目的の施設でございます。区内では、昭和40年代ごろから、施設の配置基準として小学校区を基本に整備が進められてきましたが、少子化の進展もございまして、現在は41館の設置となっております。

主な事業は、地域児童に対する居場所の提供・自主活動の支援、それから学童クラブ事業、それから乳幼児親子のひろばの事業として、ゆうキッズ事業を行っております。

利用状況につきましては、児童館の利用者数、近年横ばい傾向でございます。内訳で見ますと、学童クラブ利用児童を含む小学生の利用が中心となっており、中高生の利用は少数となっております。また、ゆうキッズ事業の実施によりまして、乳幼児親子の利用、これも一定数、コンスタントにございます。

資料5-2は、児童の関係といたしまして、学童クラブの状況でございます。

共働き世帯が増加しておりまして、学童クラブの需要についても増加傾向です。数年先には、先ほどご説明いたしました保育需要が、お子さんの年齢の上昇に伴って、学童クラブ需要の方に移ってまいります。これは確実に見込まれるところですので、的確な対応が急務となっているという状況でございます。

資料5-3は、児童、青少年行政の施策のうち、青少年の部分についてまとめたものでございます。これまでのこちらの部会での議論の中でも、無気力それからニートといったような問題が課題として指摘されておるところでございますが、やはり、人とのかかわりや社会的な自立がおくれている青少年の増加と。こういった状況を踏まえまして、方針のところでございますが、青少年の精神的な自立や社会性をはぐくむ、それから自己肯定感・社会の一員としての自覚をはぐくむといった視点から事業を進めております。

主な事業は記載のとおりでございますが、国の方でも、子ども・若者支援法であったり、それからビジョンの策定など行われております。施策事業の対象や効果などについて十分な検討の上、一定の見直しなども図りながら、取り組みを進める必要があるというふうに考えております。

資料5は以上でございます。

資料6は、近年さらなる対応が求められております児童虐待の相談件数の推移を示したものでございます。児童福祉法の改正によりまして、平成17年から市町村も、虐待通報の窓口となっております。

虐待に対する社会的な関心、この高まりも背景にございまして、平成20年度まで増加傾向をたどっております。21年度に一度減少しておりますが、教育分野での相談体制の充実が背景にあるのではないかというふうに認識しております。さらに22年度でございますが、昨年度は江戸川や大阪で非常に痛ましい事件もございまして、社会的な関心がさらに高まった時期でございます。相談件数、通報件数は非常に伸びておりまして、231件となっております。

ただ、調査の結果、虐待ではないということが判明した件数が相当伸びておりまして、実際に虐待としての対応が求められている件数としては横ばい

という状況となっておりますが、引き続き、この分野について、やはり予断を許さない課題、テーマというふうに考えています。

資料6-2でございますが、こちらは虐待に対する関係機関の連携についてのイメージをまとめさせていただいたものでございます。区では、子ども家庭支援センター中心としまして、子育てサービスの提供、それが上側の部分でございますが、関係機関の連携としましては下の部分でございます。保健センター、福祉事務所など、区の関係機関はもとより、児童・生徒、お子さんの居場所である小・中学校、保育園などとの連携、さらに地域のさまざまな関係機関、警察、児相、それから医療の関係者の皆様などとの連携を図りながら、ネットワークとしての機能強化を図っているところでございます。

資料7をお願いいたします。これらのさまざまな取り組みを進めているところでございますが、やはり、近年指摘されております子育ての不安感、負担感といったところ、それから、あわせて指摘されているところでございますが、人間関係の希薄化それから孤立化というところが大きな背景としてあるかと認識しております。

そういった中で、地域で支える、それからつながりをつくっていくといった、子育てを地域で支え合う仕組みづくりの取り組みをまとめております。子育て応援券、こちらは区の独自のバウチャー制度でございますが、民間事業者も含めての地域のつながりづくりであったり、地域で子育てを応援する文化の創造といったようなところをねらいとしております。

それから、子ども・子育てメッセ、地域の団体同士、団体と区民の出会いの場を設けるというところ、子育てサイトでの子育てに関する情報発信、それから前回の部会でもございましたが、コミュニティースクール、学校支援本部の拡充、それから地域教育推進協議会のモデル的な実施などもございますし、さらにすぎなみ地域大学、それから子育て支援者の育成といった、いろいろなネットワークと人材養成、これをセットで進めているところでございます。

すぎなみ地域大学につきましては、別紙の形で、これまでの主な子育て支援関係の講座と、それからその目的、修了者の主な活動ということでまとめて

おります。NPO法人を設立して、ひととき保育であったり、つどいの広場を運営していらっしやったり、それからサロンの開設、プレイセンターの設立、それからボランティアとしての区の活動への参画といったような、さまざまな形でご活動いただいております。

以上が各施策の説明でございますが、最後に資料8といたしまして、区の子育て支援や子ども家庭に関する施策、それから区全体の直面する課題なども含めまして、今後の方向性等をイメージとしてまとめさせていただいたものでございます。

左の部分、こちらが現状、特に課題認識等を示したものでございますが、基本構想審議会本体の方でも議論ございましたが、厳しい財政状況ということ、それから、区立施設が更新期を迎えているといった背景の中で、子ども家庭の分野でございますと、少子化／出生数それから年少人口の変動といった要素。一方で、区民の生活それからお子さんの状況などが多様化している中で、支援ニーズも多様化していると。特に保育・学童クラブの需要については増大傾向にあるという中で、どう行った対応を図っていくかというところが大きな課題となっております。

矢印の部分、二つ視点を示させていただいております。区立施設の再配置及び有効活用ということ。もう一点は、サービスの提供につきまして、地域子育て支援サービスに係る新たな拠点・ネットワークの整備というところでございます。

将来的には、効率的かつ効果的な社会基盤の整備を図るとともに、区民の皆さんのニーズにこたえていくということで、保育園・学童クラブの待機児の解消、それから子どもや子育て家庭の状況に応じた、そしてそれへのアクセスを図るというところで、地域ごとに身近で充実したサービス提供していくこと、ひいては、すべての子どもへの良質な生育環境を整備していくといったところが、目指すべきところではないかと考えております。

その際には、これまでご説明申し上げました児童館の利用実態であったり、保育・学童クラブの待機児対策、それから児童虐待対策、特に発生後だけではなく未然防止をどう図っていくかといった新たな課題、区民ニーズの多様

化といったさまざまな要請も踏まえ、地域において子ども・子育ての支援に関します施設の再編、それから新たなサービス拠点、ネットワーク、これをどう図っていくかということが課題であるというふうに認識しております。

説明、以上でございます。

○副部会長 はい。ありがとうございました。

資料は2から8となっておりますが、枚数としては10ページを超えていまして、内容も保育施設や幼保一元化、児童館、青少年事業、児童虐待、セーフティネット、支え合う仕組み、地域大学、それから今後の方向性と、多様な広がりがある説明だったと思います。

まず、ここでは、この言葉をもうちょっと説明してくださいというものがありましたら、よろしくお願いいたします。いかがでしょう。中身についてはまた議論を進めたいと思います。あるいはデータの読み方とかについて何かありましたら、よろしくお願いいたします。

よろしいでしょうか。

次に、これからの議論を二つに分けて、一つは子育て・子育てについて、施策とか現状とか課題について議論をし、それから後半、4時を過ぎましてからは、地域での子育て・子育ての支援といたしますか、子育て力をめぐる議論にというふうに分けてみたいと思います。

この最初の子育て・子育てについて、部会長から、専門の立場からご意見を伺えればと思いますので、よろしくお願いいたします。

○部会長 それでは私から方向付けの参考として、簡単にお話させていただきます。

一つは、やはり、全体の雇用条件、労働条件との絡みがあります。これも国全体の問題にもなるのですが、ワークライフバランスと言っていることが、かけ声だけでなくて、こういう3.11以降の厳しい状況の中で、どこまで本気でやっていけるのかという課題ともかかわるかと思います。全体としても、8時間労働厳守だったり、時間外労働を少なくしていくという中で、特に、子育て家庭だとか子育てをしている親たちの労働時間の短縮、あるいは育児時間保障だとか、そういうものとの絡みで、施設の保育時間がリンクしてくるわけですね。今は、ますます、子どもたちの施設もどんどん長時間化して

きた現状があつて、これを、やっぱりもう一回きちんと組みかえていかなきゃいけないという、とっても難しい問題があります。

基本的に、子育てしている親たちの労働時間を短縮したり育児時間を保障したりってことになると、当然生活費の経済的な問題も絡んでくるので、そこに、いわゆる今までの児童手当（育児手当）、子ども手当とか、杉並の子育て応援券といった、家庭の経済保障というものがきちっと整理されていく必要があるのかなと思います。それは、労働環境の問題ですね。

小学校と中学校も連携が言われているんですが、前回、小学校には小学校の独自の役割、中学校の独自の役割というものも一方ではきちんと明確にしておきたいという意見がありましたけれども、それと似ていて、3歳までの子どもたちの子育ての保障と3歳から就学前というのは、一応相対的には区分して考えてもいいのかなというふうに私は思っています。

3歳からというのは、これは幼稚園がフォローしてきた部分で、体もしっかり、足腰もしっかりしてくるし、何よりも子どもたちの集団が機能してくる時期ですね。だから、子どもたち同士のかかわりの中で、いわゆる今でいうところの5領域ですけれども、小学校のように明確に教科に分かれているわけではないにしても、それなりの分野別のカリキュラムということがきちんと押さえられることが求められている。

そのときに、一つは、日本の幼稚園が4時間保育を原則としてきたので、午前保育、あるいはお昼、給食やお弁当を食べて午後2時ぐらいのお帰りというか、そういうのが一応は基本になるのかなと思います。また、現実には預かり保育という言葉で言われているんですが、随意にというか、家庭の状況に応じて幼稚園で、要するに午後保育、随意的な午後の保育というのが、もちろんこれも幼稚園のポリシー、それぞれの幼稚園のポリシーもあるかもしれないけれども、家庭の状況に応じて幼稚園が対応していく。としたら、4時お帰り、5時お帰りぐらいのところは一応カバーしていくという体制があつてもいいのかなと思います。

それに対して3歳未満児に関しては、これは、やはり歴史的にとっても日本では不幸な出発をしてきたと思うんですけれども、どちらかといえば、貧困層

で、両親が働かないと生活していけないとか、片親しかいないとか、とにかく、子どもの保育のためというよりは、親が子どもを連れて——それこそ、よいとまけなんか、昔は子どもをおんぶして土方仕事をしていたような状況から始まるんだけど、そういう子どもたちを預かる場所としての3歳未満児の保育が始まったという、これ、すごく不幸な歴史だと。不幸って変ですけど、ずれているんだと思うんですね。

つまり、親のため、家庭のためということで、できることなら3歳未満児は家庭で母親が中心になって保育をする、子育てをすることがメイン。メインというか正当ですよという考えが、やっぱりずっと生きて今日まで来ているかなと思うんですね。もちろん、家庭の役割、母親の役割、父親の役割、家族の役割というのは依然として大事だから、そこに関してはきちんとした啓蒙なり、親教育なりというのが片方ではやられなければいけないと思いますけれども。ただ、子どもの様子を見ていたときに、私などは0歳の後半から、子どもたちは家庭の中で少人数の、たとえ母親でも、母親とだけ一日を過ごすなんていうのは、もうあり得ないというか、どちらも飽きてしまうし、もう0歳の後半になれば、もう少し開かれた関係とか、仲間とか、少し上の子どもたちがいる場所というものがとっても大事だというふうに考えるんですね。

そうすると、3歳未満児に関しては、それも随意にというか希望によってなんですが、すぐ近くに子どもセンターあるいは子ども家庭センターみたいなものがあって、そこに親子連れで一日自由に行ける場所が必ずあって、そしてできることなら、そこに見なれた先生たちや、見なれた友達や、なれたおもちやだとかという環境が、もう馴れているということを前提として、親なしの保育というのかな、デイケアみたいなイメージなんだと思うんですけども、そういうものもこれからは必要になってくる、非常に大事なところだと思っています。

また、言葉の中に思想が入ってくるんだけど、子育て支援、子育て支援センターというふうに言われるし、杉並の場合も子育て家庭支援センターという命名がされるんですが、「支援」ではなくても、子ども家庭センターあるいは子どもセンター、子育てセンターという、もう子どもたちは家庭と、

そういう地域のセンターと両方ないと育っていかないんじゃないかという、そういう何か発想を転換する言葉を基本に置いて、考えていけないかなと思うんですね。

それともう一つは、3歳未満児の場合は、結局預かりというか、貧しい家庭の子どもたちを預かるということでしたし、幼稚園も学校の同年齢クラスの編成が常識になって、5歳児保育、4歳児保育、3歳児保育と年齢が上から下におりてきましたから、その下も2歳児、1歳児、0歳児保育と、同年齢のクラス分けがなされているし、そこで今、保育者と子どもとの割合も1対3とか1対5とか、少しずつは改善されてきているけれども、イメージとしては、やっぱり同年齢集団の中に入れるという前提がある。

もちろん集団は集団なんだけれども、3歳以上児の集団と違って、非常に小さな仲間たちで、基本は1対1対応ができるという、集団の中での子育て。親とは違うけれども、保育者がいたときには3歳未満児に関しては可能な限り1対1対応ができるような人数配分だとか、小さな集団の規模だとかがきちんと考えられるといいかなと思っています。

そういうことを考えているときに、杉並区もいろんな施策があって、いろんな試みがあるんですが、やはりもうちょっと整理ができるとすっきりいくかなと思っているんですが。小学校は小学区で中学校は中学区というのがあるんだけど、就学前の子どもたちに関しては、やはり最低小学区、あるいはもうちょっと小さな地域というか、そういう小さな地域に子育てセンターが確実にある。

それをどこが担えるかというのは、地域にもよって違うし、なかなかそこが難しいと思いますけど、今は幼稚園の中にも子育て支援センターを抱えている幼稚園もあるし、保育園にも要求されていますよね。それから、児童館でも午前中に、幼児クラスなどをやったりしている。けれども、その辺をもう少し整理して、この地域はここが子育てセンターだというような、そういうようなものが少しはっきりすみ分けができるのか、できないのか。ちょっとは具体的な施策になるので難しいのですが、そういうことが必要かなと思っています。

もう一つは、もし児童館が、そういうふうの子育てセンターに改組されていく、メインがそういう地域の子育てセンターになるとしたら、今、児童館が主にやっている小学校低学年の学童保育をどう考えるかという話が出てきます。

ここも発想の転換だと思うけれども、フランスなど、幼稚園が、もう大体夕方4時、5時までやっている。だから、保育所の必要性は余りないというか、本当に必要な家庭はファミリーサポートで、いろんな人に頼んで、家庭で育児の手助けしてもらおうというのがあって、幼稚園でも4時、5時までやっているというのと同じように、小学校も、日本は小学校というのはもう教育だけ。家庭にどんなに親がいようとまいと関係なく、1年生はもう午前帰りとか、あるいは早く帰るとなってしまうというところで、やはり学童保育の需要が出てきているので、そのあたりも、小学校でも4時、5時まで、幼稚園の預かり保育という発想を学校でできないかなというようなことも考えているのです。

それはなぜかという、児童館なり地域の、そういう子育てセンターをどういうものとして作りかえていくかというときに、やはり子どもを育てるというのは、家庭の中で母親がどんなに頑張っても、開かれた空間と、ほかの親たちやほかの子どもたちとのかかわりということ抜きにしてはやっていけないというふうに思っている、そんなことをちょっと考えているんです。

お役に立つかわからないんですが、一応、私からの意見という形で提示させていただきました以上です。

○副部長 はい。ありがとうございました。

事務局からの説明に加え、部長からは論点の整理をしていただいたんだと思います。雇用の問題、ワークライフバランスの問題が一方にあって、もう一つは3歳までの子どもと3歳児以降の子どもの育ち方、育て方をちょっと分けて考えながら、最後はセンターとか児童館の役割という、後半の議論にもつながるような意見があったと思います。

それでは、30分ぐらい時間をとりまして、この子育て・育ちに関して意見

交換をしたいと思います。意見がある方は手を挙げて発言をしてください。

〇〇委員、いかがですか。

〇委員 こんにちは。

私は、1人しか産まなかったのと、結構記憶が薄れてきてしまっているんですが、保育園に通わせていただいて、とても助かりました。本当に、生活が、働かないといけない時期だったので、すごく助かっていたんですね。保育園に入れなかったら本当に仕事をやめなきゃいけないとか、変えなきゃいけないということになりますので、生活設計が保育園に入れるか、入れないかで、もう、ちょっと変わってしまうというふうになってしまうことは、何カ月か、すごくいらいらしながら仕事をしていた気がしたんですけど。

結局子どもの体がすごく弱くて、毎日のようにお迎えに帰らなきゃいけないので、保育園に入ったものの会社をやめなくてはいけなくなってしまう、そういう状況だったんですが、保育園は、やはりとても働く親にとってはありがたいものですので、すごく助かりました。

もう一つ、私は3人家族なんですね、一人っ子ですから。たまたまの話なんですけど、私の向かいは5人きょうだい、3人きょうだい、2人きょうだい、4人きょうだいと。本当に幅3メートルぐらいの路地に子育て中の家庭が7軒ぐらいありまして、いつも道路にうじゃうじゃ子どもがいる、わいてきたように子どもがいる道路で、大人の方も気をつけてくれて、その途中来ると自転車をおりてくれたりはしていた道路だったんですね。

それを見ていると、私の話は余り参考にならないんですが、5人きょうだいのおうちは、下の3人は、やっぱり保育園にも幼稚園にも入れませんでした。兄弟が見ていると。出産も、家で産んでいました。もう、そのぐらい子育てになれてくると、実は保育園も幼稚園もなくとも、社会性だけ育てるのに年長のときだけ、秋から入れていましたけども。

そういうふうに幼稚園にも入れるお金がもったいないという考え方もあるぐらいのご家庭もありますので、実は地域の力で、本当に近所に同じような子どもたちがいれば、最低限の小さい社会は成り立っていたみたいだったので、そういうふうに、ごく近い方で近い年齢のお子さんをお持ちの、そのおばあ

ちゃんとかまで、よく道路に出てきて世話をしてくれていて、昭和30年代ぐらいの感じの一角が阿佐谷にあったんですけれども。そういったふうに、とても私は恵まれた環境だったんで、そんなに困ったと思ったことはなかったですね。

ただ、強いて言えば、小学校に入る直前の方が困りましたね。学童のこともよく知らなくて、きょうだいのいるお母さんたちから、もう申し込まないと間に合わないわよと、そういう通知もすっと来てしまったりしていたという。そういう情報が、やっぱりちょっとなかったということと。

次の話題だと思うんですけど、学童クラブは何で学校の中にないのという、私の中では純粋な疑問がありました。我が家を通り越して、わざわざ学童クラブまで行ったりとか、学校の方も、学童と学校が離れ過ぎていて、地域の方がそこに入学してくれないというような意見をおっしゃっていた学校もありましたよね。学童クラブの位置づけというか、機能はいいと思うんですけども、なぜ学校の中にないんだろうと、本当に純粋に、親として思ったという記憶があります。ちょっと漠然としていますけど、そんなことで。

あと、一つだけお聞きしたいのは、基本的に、こういうことを検討する前提が、少子化についてどうこうだとか、そういったことまでさかのぼって考えることなのかどうか、ちょっとわからなくて、何とも言えないんですけど、どうでしょう。

○部会長 国は少子化対策という形で、ずっと打ち出してきましたけど、もちろん私自身は、子どもはもうこれから、そんなにたくさん産まれないだろうというふうに思っているんで、少子化低成長社会が続いていくんだと思うんですけども。

でも、今みたいに子どもを産むときに、何十万円とかお金がかかる、診察料も含めて全部保険がきかないし、医療とも絡むのでしょうか、とにかくお金がかかるということ。それから産んだ後の、子どもたちがどういうふうになっていくとか、児童虐待のニュースがばんばん入ってきたりして、みんなもう、何だか怖くて、子どもを産むのは大変ねというようなイメージが、今、何となく若い人たちの中にもあるというのを考えると、やっぱりこ

れは変えてほしいなと思います。

子どもがいるのは、逆に当たり前というか、生まれてきたら当たり前、みんな1人ずつみんながサポートしてくれるし、安心して楽しめるよって。1人産むと、ああこんなおもしろいことなんだと思って、もう1人ぐらい産んでみようかというふうに思えるような社会になればいいなと思ってはいるので、子どもの数の問題よりは、そういう、子育て観、姿勢とか、それに対する社会の手当というものを、きちんとやってほしいと思っていますけどね。

それをやったからといって、みんなどんどん産むようにはならないと思いますけど。でも、もうちょっと気楽に構えられるといいかなと。

○副部長 はい。ほかにはいかがでしょうか。

今の〇〇委員の質問の中で、なぜ小学校は学童と離れているのかということが出されました。私は江戸川区の放課後事業である「すくすくスクール」に関わっています。そこでは放課後の課外活動のほかに学童も受け入れています。

ただ、子どもにとっては受付が違って、一方では放課後の活動で、もう一方では学童でということで混乱はあるようですけど、ただ、小学校で受け入れるという姿勢はほかの区ではできつつあるみたいな印象はあります。その点はいかがでしょう。

○児童青少年課長 杉並区の方でございますけれども、学童クラブを昭和40年から始めてございます。当初は学校に入れておりましたが、当時の親御さん方の中に、学校が終わってまで子どもたちが思いっきり遊べない学校の中に残るのはという意見が非常に強くて、それ以降、小学校区ごとに児童館を建てるといふときに、児童館の中では自由に遊べるということで、児童館の方に設置をしていったという経過がございます。

○副部長 はい。ありがとうございました。

○子ども家庭担当部長 補足しますと、近年、学童保育需要の高まりに対応して、学校施設でそういったスペースの確保が可能であれば第2学童クラブを学校内に設置するなどの手だては打っています。昔は少子化に伴って児童・生徒数が減って、余裕教室の有効活用というような課題もありましたけれども、近年は少

人数指導が大分進んでおり、最近では国の法改正で学級編制基準の引き下げというようなこともあって、状況がやや変化しつつあります。

ただ、保護者の方からは、安全確保というような声も一方で高まっていますので、放課後児童対策を今後どのように進めるのか、学校改築を機にできるだけ構内に設ける方がいいのか、あるいは、今、児童青少年課長が申し上げたような考え方がいいのか、その辺はしっかり詰めて、今後の方針を立ててまいりたいと考えています。

○副部会長 はい。ありがとうございました。じゃあ、これも今後の検討事項ということで、私たちも考えていきたいと思いますが。

ほかにはいかがでしょう。

○○委員にちょっと伺ってみたいなと思ったんですが。

○委員 先ほど部会長がおっしゃったことに何点か共感するんですけどします。今、労働時間が結構ふえることによって、それに合わせて保育を充実させようと思うと、どうしても保育時間が長くなってしまって、果たして親という時間を確保しないで、保育の受け入ればかりを充実させることが子どもにとって果たしていいことなのかと考えると、保育所で預かる時間は一定に決めて、親がきちんと面倒を見る時間も確保してということは必要になってくるんだろうなと考えます。

というふうに考えると、今度は企業側が、やはり子育てということに理解を示していかなきゃいけないということで、たしか前の資料に優良事業みたいな表彰もあったように思うので、そういった形で企業側の理解というところも進めていかなければいけないんだろうなというふうに考えます。

私自身は、就学前の子育てをしていたのは、遠い前の話なので、ちょっと記憶も薄れてきているんですが、私自身は社宅におりましたので、同じような、大体5歳前後ぐらい違う子どもたちがたくさんいて、お互い預かり合いながら、住んでいたのも大きな集合団地だったので、ちょっと出れば子どもたちがいっぱい集まって公園でみんなで遊んで、その住宅にいる人はみんなうちの子どもの知っていてという環境だったので、特にこの子育てセンターみたいなものの必要性は感じませんでした。

現在、住宅街の方に引っ越してくると、先ほどこの施策の中に、いろいろ、児童館の施策であるとかひととき保育とかあるんですが、これを利用する人は十分に活用してとても充実しているようです。ひととき保育、また預かり保育なども子育て応援券などが使えるということで、本当に区の施策を十分に利用して、充実して子育てをしている人がいる一方、全く親が人とかかわらない中で子育てをしている人がどうしているのかというのがとても心配なところで。

今日、ちょっと私の友達にリサーチをしてきたんですが、やはり生まれてからある一定期間の中には、保健所の方から、子育てについての悩みはありませんか、どうですかというようなお電話があつて、それは申し込んだ方には必ずその相談があつて、申し込まなくても電話で確認があるということで、それはとてもありがたいというお話がありました。ただ、そういうところで、やはり、問題を抱えていながらも人と相談することができなくて悶々と子育てをしている人たちが、多分幼児虐待とかストレスでということにつながってくるので、実際にそういうのはどうなのかなというのを、知りたいなと思いました。

それから、この保育園の待機児童の推移の表を見ていまして、平成22年度に待機児童、児童数が23人だったのに、23年度にいきなり71人に上がるということは、多分、杉並区は待機児童が少ないということで、外部から入ってくる数が多いんだろうなと思うんです。これをどこまで待機児童ゼロを目指すかというのは切りがないと思うので、そのあたりをどういうふうにしていくのかというところも、ちょっと考えていく必要があるのではないかと思います。確かに子育てする人が杉並区は待機児童が少ないと杉並区に移ってきて、住んでくださって、子育てして、大きくしてって、すごくいいことで、ありがたいと思うんですけれども、余りにそれを、ウエルカム、ウエルカムで待機児童をゼロにしますという方向性だと切りがないので、そのあたりをどのあたりで切るのかなというのも、ちょっと心配ですね。

あと、子供園ですか、幼保の、保育園と幼稚園の役割というのが、今までは全然違うというイメージがあつて、幼稚園は学校に行く前のプレ教育として

の施設であって、保育園は家庭の役割の一貫を担っているという私は認識だったんですけども、それを一体化することによって、どうやってうまく一緒にしていくのかなというのが、私としては余りイメージがつかないので、チャレンジでもありますが、これがうまくいくといいなとは思っております。

何か、大してこれといった政策とかは出せないんですけど、一応感想ということで。

○副部会長 はい。ありがとうございました。

今の〇〇委員のお話の中で、行政の方に確認したいんですけど、この待機児童数が急に23年度に上がったという理由が、外からの受け入れがふえたということなのかどうなのか。また最後の幼稚園ですね、幼稚園と保育園が一緒になってという政策がどの程度進んで、本当に一体化が可能なのかどうかとかいうことも含めて補足の説明があればと思います。

○保育課長 保育課長です。

今のご指摘の点ですけども、確かに、施策の充実による、いわゆる呼び込み効果というか、イタチごっこということが非常に強いのかなと思います。

具体的には、杉並区の場合、例えば22年1月から23年1月の1年間の推移を見ても、総人口自体は若干減っているんですけども、いわゆる就学前人口が501人ふえていると。これが、同時期、世田谷が1,100人ぐらいふえて、片や板橋区は20人減っている。中野も31人微増と、本当に近隣区でも色合いが濃くなっていると。

それをどう分析するかというのはあるんですけども、私どもとしては、去年、待機児対策を非常に進めて大きな成果が出たと。それによって、この辺の杉並の山の手に移ってこようという皆さんのやはり選択行動に影響があったのかなということで、ご指摘のとおり、それを、じゃあどこまでフォローしていくかというのは、やはり今後の大きな考え方、課題だと思います。

以上です。

○副部会長 幼保一元化については、何かございますか。

○子供園担当課長 子供園担当課長です。

今ご指摘ありましたように、幼稚園と保育園の機能が別々であったということは、そのとおりだと思います。ただ、この間、保護者の立場からは、幼稚園の保護者の方からは、やはり一時預かり、預かってほしい、そういうサービスが欲しいというお声の一つあったということと、あと保育園の方では、学校に上がる前に幼児教育をきちっと受けてもらいたい、受けさせたいというようなニーズがある。そういうお声があったということが一つあります。

それと、先ほどの保育の待機児対策という面では、3歳の受け入れということが一つ課題としてありましたので、従来、幼稚園では区立は4歳、5歳だけ受け入れていたんですけれども、そこに3歳の受け入れ枠をつくって、3歳から入れていくと。なおかつ、就学前の教育という観点からは、働いている親御さん、あと在宅、専業主婦の親御さん、そういう働いている、働いてないという区別ではなくて、どういうお子さんでも受け入れて、きちっと幼児教育を計画的に進めていくのが必要ではないかということで、22年度から開設しておりますけれども、従前の幼稚園の施設で受け入れを開始してまして、去年3歳、18人の1クラスの定員の中で9名、長時間のお子さんの枠を設けて進めてまいりました。

実際に運営する中では、幼稚園の教諭と保育士が一つのクラスを見ていますが、親御さんからは、多面的に子どもを見てもらえるので、ある意味安心だということだとか、保護者への報告も細かくしていただけているとか、そういったお声もあります。

もちろん課題も施設的な面ですとかあるんですけれども、今現在、今年の4月にまた成田西と高円寺北を始めましたけれども、応募をされて、1年、2園、下高井戸と堀ノ内の子どもに合ったんですけれども、その様子を知って、徐々によさがわかっていただけているのかなというところがございます。

○副部会長 はい。ありがとうございました。

それでは、ほかにはございますでしょうか。

○委員 私は子育て経験はないんですけれども、これから子育てをする世代として、ちょっとお話をさせていただきたいと思います。

部会長がおっしゃっていたように、ワークライフバランスを考えるときに、

本当に日本全体の雇用状況というのはとても重要だと思うのですね。なので、杉並区がどうこうしてという問題ではないかもしれないのですけれども、本当にこれは、20代、30代の働く女性にとって、子どもを産むか産まないかという点からしても、仕事をどうするのかという点からにしても、本当に悩ましいことで、もう、それをいつも考えて、例えば今は忙しいから子どもが産めないですとか、出張がやっぱり今後3年間入りそうだからとか、そういうことを考えてやっていくと思うので、とても難しい問題ではあるかなと思います。なので、本当にいろいろ施策を出したり考えたり、いろんな取り組みを杉並区がすることで、その取り組みをしているということがとても働く女性にとっては安心感が持てるというか、希望の光というか、とてもいいことだなというのを実感しております。

私は、昨年、杉並区の子育て政策がよいと聞きまして、杉並区に引っ越してまいりました。まだ、子どもはいないのですが、でも、周りに全く知っている人がいない状況で引っ越してきたので、周りの人を知らないとか、そういう状態の中でどうやって子育てをしていくのかというのを考えると、ちゃんと自分でできるのかなというのはすごく不安に思うところなんですね。

そういうときに、本当に杉並区さんは子育てサポートがとてもあるので、それを活用していこうかなとは思っているのですけれども、さっき〇〇委員がおっしゃっていたように、実際それを活用するときに、ちょっと一步踏み出せないということもあるかと思えますし、このサービスを利用するために知らないところに行くのってすごく難しいことだと思うので、一步踏み出すのが難しいというお母さんもいらっしゃると思えますし、また仕事をしていて、そういうのもとても難しいというお母さんもいらっしゃると思うので、そこをどうするのかというのはとても重要な問題ではないかなと思います。

待機児童解消の問題というのは本当によく取り組んでいらっしゃるけど、とても重要な問題だと思うのですが、先ほども出てきたように、本当に仕事とのバランスという面で考えると、児童を保育園とか学童保育に入れた後の、仕事とプライベートのバランスというのが特に重要になってくるのではないかなと私は思っていて、そここのところは本当に個人個人で調整するしかないの

ですけれども、先ほどちょっと意見にも出ました、企業ですよ。杉並区さんの方でもやっつけらっしゃると思うんですが、企業にそういうワークライフバランスを促進させることで、杉並区の企業だけかもしれませんが、そういうふうにする中で、杉並区の企業に働いている人というのは、東京都とか、ほかの関東のいろいろな地域から来ている人なので、そういうところで少しずつ小さい種をまいていき大きく輪を広げていくみたいな感じで、杉並区がまたそれもリーダー的な立場をとってやっていると、広がっていくのではないかなと思っています。

なので、後でちょっとお話に出るかと思いますが、杉並区子ども・子育て行動計画の中に、ワークライフバランスに向けた取り組みを行う企業の普及促進というところが推進プラン1の4番目の項目で書いてあるんですが、もうちょっとこの順位を上げたりしてもいいのではないかなと。待機児童と同じぐらい、メンタルな面というのはとっても重要なことだと思うので、と、個人的に感じました。

以上です。

○副部長 はい。ありがとうございました。

ほかにはいかがでしょうか。○○委員。

○委員 保育園の問題についてなんですが、例えば就学前で0歳、1歳児を認可、区立の保育園に預けるときに、行政負担が約70万円ですか、0歳が100万円で、1歳が70万円ぐらい。

○保育課長 全体では、区立保育園の、いわゆる区負担分が、年間トータルで大体200万円強です。これは、逆に0歳児は極めてコストが高くて、大体四、五百万円ぐらいになっています。

○委員 そうことを考えると、保育園というとそれは非常にいい施策かと思うんですけれども、当然、認可保育園に入れる方というのはごく一部なので、違う保護者や第三者から見れば、保育園に預ければ、当然保育料は所得によって違いますけれども、0歳児でも最高限度額が5万円以内。でも、認可外のところに入れると、多い人は20万ぐらい、下手したらかかってしまう。

ということを見ると、逆に、例を挙げると、例えば六、七万円のパート

収入で保育園料を、所得によって、だんなさんの——いろいろとあるかもしれませんが、二、三万円の保育料を払っているとすれば、そういったコスト的に考えれば、そういう家庭には、逆にばらまきと言われるかもしれませんが、現金で支給した方が、行政のコスト的には、200万円かかっている分が、逆にそういうことを入れないという形になれば、それを別な行政サービスに充てられるというふうなことが、今後私は、税金が将来的には上がらないと考えるならば、そういったことも必要であるのかなというふうに考えております。

以上です。

○副部会長 はい。ありがとうございました。いかがでしょうか。

じゃあ、私も一言といいますか。

私は息子が2人いて、杉並の私立の幼稚園に通わせていました。その園長先生が私大好きで、今でも時々話をするんですけど、やはり幼稚園の経営がだんだん難しくなってきた、午後まで預かるというシステムにしないと、応募者が激減しているという現実があるようです。それは、いい意味では、女性の社会進出といいますか、共稼ぎの家族がふえているという点で一つの新しい方向性だと思うんですけど、今の議論にありますように、不況で、また3.11以降ということも考えると、女性も含めて仕事がますます大変になって、それならもっと預ければいいんだという傾向が生まれています。これはちょっと行き過ぎではないか、やはりワークライフバランスといいますか、男女共同参画としても、ここでは議論しなきゃいけないなと思って考えてました。男性も女性も仕事を持ちながら子どもを育てていく環境づくりは大事だけど、でも、そのために、預ければよいということにはならない施策を考えなきゃいけないなと思います。

前半の議論はそろそろ終わりにしようと思うんですが、部会長が板書をしていますので、せっかくですから、ちょっと一言。

○部会長 ○○委員が言っていたこととか、0歳児の財政負担の話とか載せていませんし。出たのをただちょっと整理しただけで、課題ですけど。○○委員は何も言われていませんね。

○委員 僕はもう、かなり昔なんでもということと、専門外なんでも具体的な施策については余り申し上げられないんですが、今お話を伺っていて、今回のこの部会で、環境というか、地域ということで、子育て環境という観点から3点ぐらい挙げたいと思うんですけど。

一つは、中学校教育における子育てということの位置づけというのを、もう少ししっかりやる必要があるんじゃないかと。つまり、家庭とか家族という構成が従来とは違った形になってきていると思うんですよね。その中で、自分が自立していくことと同時に、子どもを育てることはどういうことかということの見直しが必要になってきているんじゃないかなということが一つ。

それから今、〇〇委員からもお話がありましたけれども、保育と、それから子育てについて、やはり地域単位ぐらいできちんと情報提供というか、学習の機会があるということは非常に大事だと思うんですよね。そこで情報をうまく共有できているということは、情報というのは常に受け付けているだけだとやっぱりアンバランスになっていて、積極的な方のところにはたくさん行くけれども、ちょっと、引っ込み思案な方には行かないというときに、今ここで議論になっている、その地域というのをどのような単位にするかは別に考える必要がありますが、やはり子育てについての地域での教育の機会というのは必要だと思います。

それから、3点目は、相談相手というのが、もちろん今もいろいろ区はなされているわけだし、特に杉並は子育てについては非常に厚い取り組みをなしていますけれども、やはり顔を見合わせて相談をする、つまり行政が解決しない問題もたくさんあると思うんですよね。地域の知恵みたいなものを子育てに還元するような相談相手みたいなものを地域に育成すると。ここに、今お話に出た子育て支援サービスみたいなことが、非常にかたい行政だけのそういうサービスではなくて、地域の方たちが横につながれるというような仕掛けを、子育ての環境としても考えていく必要があるんじゃないかと。

行政は、施策として、直接的な経費である大きな経費を投入することも大事なんだけれども、もう少し、きめ細かな情報共有のための施策というのも、ぜひお考えいただければということ、感想として持ちました。

○副部会長 はい。ありがとうございました。

3点ということですが、1点目は中学校ですか。

○委員 そうですね。中学校、小学校から中学校にかけてなんですけど、今、どこの部分で——やっぱり、この問題、すごく欠けていると思うんですよね。

ワーキングバランスになったときは、もうこれは大人の世界の考え方で、子どもたちが育っていく中で、どうやって家庭あるいはそういう、一つの私的な単位をつくって、そこで子どもを育てるということがどういう意味を持っているのか、あるいはどういう夢を抱けるのかということが、教育の中ですごく欠けてきているように思うんですよ。家庭という単位が変わってきているということによる大きい影響があると思うんですけれども、やはり何らかの形で、正規教育の中じゃなくても、補助的なものでもいいんだけど、そういう機会が必要だろうということですね。

それから、2点目はその当事者に対する教育と、それから、3点目は相談員の問題です。

○副部会長 ありがとうございました。

もう既に2番目の地域の子育て力というテーマにも入りつつありますので、そちらに移っていきましょう。○○委員のご意見は、ワークライフバランスというのは大人の問題です。地域であるいは子育てを考えるという場合に、昔のことをイメージして昔の子育てを復活しようといっても、家族のあり方そのものががらっと変わっているということを前提にする必要があります。単に昔がよかっただけではない方向を探る必要があるんじゃないかということですね。

それから、今、センターの話が出ましたけど、どういう規模でセンターの範囲や支援の範囲を考えたらいいか、あるいは支援の届かない親にどう支援を届けていくかという議論も一方であります。しかしもう一つは、そういう、行政にいろいろ頼むだけじゃなくて、地域の子育て力というのは、別に行政だけにおんぶにだっこではなく、地域の人々がお互いに顔が見えるような関係でかかわっていくシステムみたいなものをどうつくっていくかということも思います。

それでは、次、この地域の子育て力について議論をしたいと思います。事務局からの資料では、後半の7番目と8番目のセンターの話等についてにかかわることだと思えます。これについて、何かありましたらよろしくお願ひいたします。

言い始めて、私から発言しますが、私も先ほどの部会長の意見の、支援という言葉がやや気になっています。これからの10年を考えると、この支援という言葉を見直すのもいいのではないかと。乱暴な問題提起かもしれませんが。

支援というと、かわいそうな人がいて、それを助けなければという構図があります。もっと対等な関係といいますか、子どもも、理想論ですが、自分たちのことを自分たちで考える人間に育っていく。そのような子どもをサポートするのを支援と訳すのか、それとも地域の人たちが子育てにかかわるといのは、応援という言葉でもいいのかなと思ひ始めています。余計な問題提起をさせていただきました。これを呼び水にして、何かございますでしょうか。

部会長、何かありましたらお願いします。

○部会長 先ほど言ったその地域の子育てセンターのイメージですけど、生まれると、病院なりに行って、あるいは自宅で産んでも、保健所が、最初はコンタクトをとりますよね。保健所が新しく生まれた子どもたちのデータを持っている。保健所に0歳、何か月健診かで行って、その後なり、あるいはその間をずっとつなぐところとして地域のそういうセンターがあつて、そこは、保健所ともすごく連携してほしいというのがあります。

それから、その子育てセンターのイメージですが、そこに当然保育の専門職はいてほしいけれども、その周りに、もし人手が必要になったときには、杉並区でも人材育成でいろいろ資格を出したり、子育てサポーターだとか、そういう人たちを学習によって認証を出したり認定したりという、そういう人たちが結構出てきているので、そういう人たちもそこにかかわるといような感じで。

気楽に親子連れで、ほとんど毎日、それも時間は自由で構わないと思うけ

れど行ける場所があって、雨でも遊べて、そこに行けば親たちとも話ができて、子どももいろんな子どもが見れてというのがあって、そこで、やはり、何かちょっと聞きたいな、心配だなということが気楽に話せるというシステムもあって、ちょっと重要なことは、もちろん相談室に申し込んでと。何か子どもが生まれたら、そういうところにずっとネットワークができていくようなシステムができるといいかなと思っているんですけどね。それを、各地域でどういうふうにつくっていくかが難しいとは思いますが。

○副部会長 はい。資料8でしょうか、資料7の図に保健所が入るんじゃないかという問題提起だと思いますが、この点は区の方はいかがでしょう。

○子育て支援課長 子育て支援課長でございます。

今回の資料には、確かに保健所などは、イメージ的にちょっと入っておりませんが、もちろん子どもの出生前から誕生、それから発達のそれぞれの段階で、さまざまな機関がそれぞれの役割に応じて連携をしていくというのは、基本的に本当に非常に重要なことだと考えております。

例えば虐待の関係でもございますが、例えば、これまでの議論の中で出ておりましたところだと、新生児の全戸訪問ですね。今は希望制ではなくて、出生の届け出があったご家庭には、すべて保健センターの方から訪問に行く仕組みとなっております。

その中では、母子の健康状態の確認はもちろん行いますが、区のいろいろな子育て支援サービスのご案内もあわせて行っているところでございますし、そこで、今支援が必要だというご家庭などにつきまして、保健センターで非常に精力的に取り組んでいただいておりますが、もちろんほかの機関、子ども家庭支援センターなども含めて、対応を行っているところでございますので。

今回の資料では、保健センターなど、明示的に入っておりませんが、もちろん概念としては入ってくるものというふうに認識しております。

○副部会長 はい。ありがとうございます。

それでは、ほかにはいかがでしょうか。○○委員。

○委員 このセンターの規模というのは、結構大きい感じのイメージなんですかね。そんなでもないですか。

私が入っているビルのテナントに民間学童が入っているんですね。放課後は学童です。午前中は未就学児が来ています。そして民間で経営をしていますね。そういうふうに、時間帯によって用途が違ったり、そこは変わっています。オフィスビルですけど、入ると畳で、子どもがごろごろしているという状況で、回っているようですね。

ですので、考え方として、仕組みはあってもいいんですけど、器の問題ではなくて、それがどういう形でも、下手をすると喫茶店の個室があればいいのか、もう、そういうレベルのことなのか、何とかセンターのような建物のことを言っているのか。書いてある、解消に役立つという結構な規模は必要なのかなと思いますけども、やっぱり、子どもの数が随分変わりますよね。それと、箱ではなく、今、既にそういうふうにちょっと似たような動きをしている会社さんというのは結構ありますので、そういうことでもいいのであれば、もっと気楽にということと。

システムをがっちりつくってしまいますと、自主的に人の輪が繋がらない気が逆になります、私としては。困ったので近所のおばさんに聞きに行ったり、いろいろしたわけで、自主的な方たちが自主的に動いて——動けない人がいるからそういうことも出てくるんですけども。どうですかね、私は余り、この仕組みがあればそれで助かるかという、結局利用しない方はしないので、緩やかで、最低限のものが用意されていればいいのかなと思ったんです。

あとは、メンター制度というのかな、ほかでは結構やっているんですけども、一番頼りになるのは、保育園の先生とかも頼りになりますけれども、何か上のお母さんと会いたいというのが私としてはありました。専門員の、役職のある方ではなくて、本当に近所の、6年前に小学校を出たお母さんとかの話は物すごく参考になったという記憶がありますので、何かがちっと、そういうのではなくて、気軽に子育て中のところにそういう方が来られるような、マッチングできるような自然な仕組みでいいと思うんですけども、何かそういったような軽いものではないでしょうかという気が、ちょっとしました。

○部会長 私もそれは同感ですけどね。そこは難しいところでしょうけど、システムと

して、どこまで押さえてプランニングするかということと、あと、昔は共同保育だとか、親たちが集まって、ちょっと広いお部屋のある家に集まったり、お天気だったら公園だったりという、そういうのでやったりしていたものを、それは本当に勝手にやっているものだとということにするのか、若干の何か少し補助を出すかとか、そういうこともかかわってくると思いますね。

やはり、人間にかかわるところというのは、当事者は結構、子どもを産んで育てる間って、大変だけでも、何か二、三年ってずっと過ぎていっちゃうし、数も変わるし、ある地域なんかは、ほとんど子どもがいなくなっちゃうということもありますのでね。そういう意味では、とってもコンクリートにキチキチにやったら、もう全然機能しなくなったり、後の有効活用をどうしようなんていうふうになってくる部門ですよ、こういう人間相手の施策というのは。

そういう意味で、今言われたような、多様な人たちの参入ができて、それなりの補助ができて、そして必要なときには、そういうものが幾つもできて、必要でなくなったら上手に解散できるみたいな、そういうイメージができるといいのかなとは思いますがね。

○副部会長 そうしますと、何か「子育て支援センター」という名前が出てきて、「支援」と「センター」という名をとっちゃってもいいんじゃないかとなると、どうしたらいいんでしょうというところもあるんですが、人間とかかわり合うときに、入れ物をつくるということだけではなくて、どうやって、そのネットワークを大事にしていくかという議論になっているのかなと思います。いかがでしょうか。

○委員 子育てセンターということ、地域ということで考えると、既にできている建物としては、児童館があります。杉並はほとんど一つの小学校に一つの児童館があって、それはほかの区ではないことで、一つの学校に一つの児童館があるから、学童もその児童館に入っているということを聞いたことがあります。小学校区に一つ児童館があるのであれば、今、ゆうキッズという乳幼児の取り組みもされているので、そこを発展させたりとか、あと、だれでも自由に使えるサロンみたいなのがあって、ちょっと悩んでいるお母さんとかが

来て、子どもを連れてお茶でも飲みながら先輩のお母さんの話を聞いてとか。あるのかもしれないんですけど、そういうところをもうちょっとフランクに利用できるような、その建物のキャパシティみたいなのもあると思います。もうちょっと身構えずに出入りができるような工夫があったらいいなと思います。

ひととき保育が結構、そういう悩んでいるお母さんも来ているようなイメージがあります。比較的うちのそばは、保健所もあって児童館もあって、ひととき保育もあるので、結構皆さんが活用しているようなイメージがあるんですけど、ひととき保育も、ちょっと忙しいとき、ストレスがたまったとき、何かちょっと預かってほしいときに応援券などを使って預けに来ると、なかなかお母さん方は時間が終わっても帰られないみたいで、そこにいる保育士の方にいろんな話を聞いてもらって、すっきりして帰っていきみたいなものもあるので、そういうところも、もうちょっと皆さんが利用できるような広報とか仕組みがあったらいいなと思います。

それから、私は町会の方もちょっとやっています、今、町会で、いろんな方から、子ども会のようなものを復活したいということをしごく言われまして、そのためには若いお母さんが頑張るねと私に振られるんです。要するに、町会でいろいろやっても全然子どもも出てこないし親も出てこない中で、昔は子ども会みたいなのがあったよね、そういうのを復活したいね、何とかしてね、と言われるんです。今の子どもも親も忙しくて、なかなか土日フリーの人がいないんですね。なので幾ら楽しいイベントを考えても、来ないんです。

子どもと一緒に何か事業をすると区から補助金が出るので、そういうことも使いたいからやると言われるんですけど、なかなか、どういうものをやれば、その子ども会のようなものを復活できるかという手だてが私にはなくて、多分どういう企画をしても集まらないだろうなと思います。補助というのもしごくありがたいんですが、そういうところのちょっと知恵を専門家の方とかにかしていただくと、しごくありがたいなと思うんです。

町会の方は結構やる気満々なんです。何とか子どもたちと一緒に何かやり

たいと思っていて、結構自由な時間を持っているお年寄りもたくさんいるので、やりたい、やりたいという気持ちはすごくあるんですけど、どのようにしたら子どもたちが集まって、そういう仕組みができるのかというノウハウがないんですね。なので、そういったところもちょっとアドバイスをしていただけのようなちょっと何かのシステムがあると、とってもありがたいなと思っています。

○副部長 ありがとうございます。今まである施設を利用してということとか、地域の年配の人たちのやる気と子育てをどうつなげていくかという提案だと思いますが、いかがでしょうか。

○委員 私は、すぎなみ地域大学の子育てサポーター実践講座に去年参加させていただきまして、講座を受けさせていただきました。何名か、レクチャーをしていただいた方もここにいらっしゃるんですけども。

そこで実習というのがありまして、児童館に実際に行って実習をするという機会があって、そのときに、たしか3歳未満とか、すごく小さいお子さんの集まりがあったので、そこを見学させていただくということだったんですけども、先ほどもちょっとお話に出ていたように、本当にお母さんとお子さんが気軽に来て、お友達をつくって帰っていくというのがすごく自然にできていた児童館だったんですね。

なので、私は、それを見て、とてもいい仕組みがあるんだなというのを感じて、多分児童館によって違うかもしれませんが、いろんなサポートの仕組みがあるので、そこだけが、もしかしてそれをやっているとか、ほかのところはやってないとかいうこともあるかもしれないんですが、そういうのはとてもいい取り組みだと思いますし、もう既にいろいろな仕組みがあるので、それを発展させていくというのはとっても重要なことではないのかなと思います。

それで、講座にちょっと参加して思ったのが、ほとんどがお元気な高齢者の方々もしくは40代以降の方々に、20代は多分私1人と、ほかのもう一人ぐらいだったんじゃないかなと思うんですが、チームになって話す機会があって、皆さんこれから講座を修了されてボランティアに行くという段階だったので

すけれども、本当に地域のために何かをしたいとか、自分の経験を生かしたいという思いがすごく皆さんあって、普通に生活しているだけだと、周りの人がそういうことを考えているってわからなかったの、とっても刺激を受けましたし、子育て経験がないと言うと、もう何かいろいろな情報をくれたりとか、本当にやる気がたくさんある方々が多いなというのを感じたんですね。

たしか30名だったかなと思うんですけど、もっと50名とか多くの方が応募して、抽選で落とされた方がいらっしゃるというふうに聞いていたんですが、やる気がある方がたくさんいるので、そこをもうちょっと、来た人すべてではないですけども、とにかく受け入れて、そういうやる気がある人の団体をもっともっとどんどん大きくしていくと、地域のパワーが生まれるのではないかなと思いました。

制限していなくてもどうしても年代には偏りが出てきてしまうかもしれないんですが、高齢者の方のみがボランティアをやるとか、若い人だけがやるかではなく、年齢で制限されないように、できるだけ地域の、いろんな年代の人が集まってこられるようになるといいのかなと思いました。ちょっと難しいかもしれないんですが。

○副部会長 ありがとうございます。

○○委員からはすぎなみ地域大学の話が出ましたが、補足の説明とかはありますでしょうか。それから、地域大学に対して大人塾という教育委員会の事業もありますけど、教育委員会ももっと子育て支援にかかわろうとか、そういう決意表明などはございますでしょうか。

○社会教育スポーツ課長 社会教育スポーツ課長です。

私どもの社会教育センターの方で、地域の教育力の向上ということで、既存のお母さんたちの子育ての団体等の活動に対しての助成は行っておりますし、家庭学級ということで仕組みづくりもしているところですけども、なかなか広がりがないという課題はございます。あと、そういう団体の方々が集まって、家庭教育フォーラムというような感じで意見交換会を行っております。やはり決まった顔ぶれというのは、こちらの方も課題としてはあります。

大人塾に関しましては、その都度その都度、それぞれの集まったメンバーが自分で課題を見つけ出して取り組むという形になりますので、卒塾した方の中には子育てにかかわっているグループをつくっている方もいらっしゃいます。

○副部会長 はい。ありがとうございました。

地域大学の方は、これは修了者が登録制度か何かでかかわりを持てるような仕組みだったように記憶はしていますが、〇〇委員が言われたように年配の方が多くて、地域というと、やはり働いている人とか、あるいは子育てがちょっと終わった直後ぐらいの人とかいう人たちもなるべくフランクにかかわれるようになってほしいですね。

私は、年配の人というのは、熱意を感じてすごくありがたいと思う反面、少し世代が離れ過ぎていて、時々叱られて困ってしまうという経験を持つこともあります。余計なことを言って申しわけないんですけど、もう少し切れ目なく、つまり、支援する側も切れ目なくということがあるといいなと個人的には思いますが。

ほかにはいかがでしょうか。〇〇委員は何かございますか。

○委員 先ほど〇〇委員が言われた、子ども会を復活してほしいとか、地域で子育てをする仕組みって、行政側は、先ほど言ったように児童館等でありませけれども。これからはやはり、当然それも重要だと思いますけれども、地域の方がみずから行っていくことが今後は重要なのかなと。

私たちの地域も、平成14年に地域で子育てなどを共有する組織をつくろうということで、町会青年部と各小学校のPTAと関係する団体と、意見交換会の場をつくろうじゃないかということで、あれからもう7年ぐらいたちまして。毎月、月1回会合を開いて、さまざまな子育ての問題、青少年の問題とか意見交換をして、非常にいい仕組みで現在行っているのです。

これがもう少し発展をして、地域という――地域といってもじゃあどこが地域かという議論もありますけれども、とりあえず中学校区域を一つの単位として全区的に広がって、地域みずからが主導して、いわゆる「民」主導ですね、やっていく仕組みが今後求められ、早急にそういうものができていく。

システムづくりは行政がやるべきかなど、逆に。そういうことを行っていただければ大変ありがたいなと思っています。

以上です。

○副部長 はい。ありがとうございます。

部長。

○部長 子ども会はつくれるといいなと思ってはいるんですが、ただ、先ほど〇〇委員が言ったように、切れ目ない年齢の人たちがもうちょっと地域にかかわれというのも、これもよくわかるんですが、実際は、働き盛りの年代の人たちは、自分で一生懸命、外向きと言うと変だけれども、地域には寝に帰るところというほどひどくはないけど、やっぱり、今のままだったらそうなっているし。

それから、子どもたち自身が、忙しい。だから、子どもたちをそういうところに引っ張り出す時間はあるのですか、というのがどうしてもあるんですよ。これはもう、学校とか先生たちとかと一緒にやってやらないと。

何か、人集めて、子どものためになんてやっているけれども、やっている人たちが大変で。実際は塾に行っていたり、部活だったり、皆さん忙しいですよ。

やる気のある子どもたちは一生懸命いろんなことをやっていて、大忙しだし。あとは、もう、家に閉じこもって自分で音楽を聞いたり、ゲームしたりとか、そんな感じがして、なかなか難しいなと。

感想です。

○委員 そうなんです。おっしゃるとおりなんです。そこで、我々も、本来使っちゃいけないわぎなんですけども、例えば、そういうものをやるときに、その助成金制度を使ったり、協賛金を集めたりして、商品をよく、例えば1位になったらDSのゲームですよとか。

これ、我々相撲大会を地域でやっているんですけども、ちょっと相撲大会は恥ずかしいから70人ぐらいしか集まらないんですけども、今度はちょっと違うもので、スリッパ飛ばし大会でDSを1位商品にしようじゃないかと。すると、やっぱり150人、200人って、すぐ集まってくるんですね。本当はそう

いうことをしてはいけないんですけれども。

そこからさまざまな、来てもらったんだからそこで情報発信すれば、当然親御さんが子どもを連れてきますから、要するに幼稚園の年長から小学校6年生、中学校3年生までの部門別につくれば、そこでまた新たな交流が生まれて、そこから継承、発展していく。それが我々の意図なんですけれども、そういったことをしていくのが、正直言って、そういうものをえさ——えさと言ったら変ですけども、やっているのが実情でございます。部会長が言うように、大変でございます。

○副部会長 ○○委員、いかがでしょう。

○委員 私は、よく子どものイベントとかを、キャンプとかツアーをやるんですけども、二つあるんですが、町会の方の話が出ていて、私も常々思うんですが、年齢は別に上でも中身が若ければ私はいいと思っているんですけれども、ちょっと、中身も年齢が上だなという方が結構多くて、子育て世代の親と町会の方たちが一緒に行動しづらいんですよ。歩み寄っていただけないかなというのが正直あります。また同じ会話、議題が始まると。途中でお茶を飲む時間があって、こっちは仕事を途中で抜け出て忙しいところを来ているのに。その辺で、歩み寄らないと、なかなか40代と70代と一緒に活動するとかって、難しいと思うんですね。だから、その辺は、少し両者が歩み寄る、子育ての親の世代ぐらいの気持ちがわかってもらえるぐらい。それから、生活サイクルですよ。その辺がわかっていただけたら、もうちょっと活動できるんですけれども、大体40代の親がかかるとドロップアウトして町会から出てしまうという話をよく聞いていますので、歩み寄れたらうれしいなと思っています。

それから、○○委員がおっしゃった仕掛けの部分は確かに必要なんですけど、物もいいんですが、魅力的な人がいる、すごいおじさんがいるでもいいんですけれども、そういったことだと、集まったりはしますし、子どもも魅力があれば来ますので、主催者側の魅力じゃなくて、子どもから見た魅力ある仕掛けを、何か参考にいろいろ考えてみていただければ、行っておいでと、親も出せると思うんですよ。つき合いで行っておいでみたいなことは子ども

に通じないので、そこは、受け入れる側がちょっと勉強をしていただきたいなというのが少しあります。

○副部長 次は〇〇委員です。

○委員 〇〇委員がおっしゃったこと、僕、総論として大賛成なんですね。今回の基本構想にはその観点を絶対織り込むべきだと。それは防災のことを含めても、今までのような町会イメージ、それから今までのような民の活用ではだめだというふうに思っていて、それはいろいろぎくしゃくすること、あると思うんです、世代間の問題とか。しかし、やはりそういうものを地場につくっていかないと、本当に一つ災害があったときに、区単位でも負いきれない問題というのはたくさん出てくると思うんですね。そのときに、本当にその地域が力を持っているかというのは、子育てを含めて大事なことだと思うので、ぜひ何らかの形で、今までの経験がうまく生かされ、また、それに新しいイメージが盛り込まれるような方策なり施策なりを考えておく必要がある。

○副部長 はい。

では、〇〇委員。

○委員 自分で地域でとか子ども会とか言っておきながらなんなんですけども、実情としましては、今、ちょっと内容は幼稚園児、未就学児から離れちゃっているんですが、子育てしている親が地域に参加することを必要としていないんです。

過ぎてわかる地域の大切さというか、子育てが終わって、ある程度大きくなっていろいろ考えてみると、地域って大切だよ、地域にかかわるべきだよ、地域に出ると、先ほど〇〇委員がおっしゃったように、結構世代間のギャップがあって、行くと必ず、「今の若いお母さんは」という、「昔はね」という話をされて、すごく居心地が悪い思いをして皆さん帰られるんですね。なので、余り、行って気持ちのいいところじゃないので、行かない。別にそんなところに行かなくても、自分の子どもはサッカーのクラブチーム等でやっているし、本当忙しくて行く暇もないし、行く必要性を全く感じていないので、こちらがどういう手だてをしても、出てこない。でも、地域の方は必要性を感

じて、やっぱり災害時とか、いろいろタッグを組むべきだと、日ごろのつき合いが大事だと思っているので何とか取り入れたいという、その意識の違いが、どうしてもうまくいかない原因だと思っています。

私の周りでも、幾ら声をかけても、例えばお祭りがあるから、こういうお菓子が出るんだよ、こういう楽しいことがあるんだよと言っても、出てくる人は本当に限られていて、本当に人集めが大変な状況なので、こういう地域が大事だという議論をしているところで、こう言うのはなんなんですけども、本当に親たちが必要性を感じていないというのが、ちょっと大きな問題の一つというか、ここを解決しないとどうにもならないなという感じがしています。

○委員 　　ちょっと補足でいいですか。

地域って、根こそぎと考えると、すごく大変なんですよ。むしろ、地域母体の小さなこと、例えば3人ぐらいで集まって何かやっていますよとかということ積み上げていくしか、しょうがないと思うんですよ。いきなり全部が同じように、向こう3軒両隣みたいな形で固まりましようみたいなのは、僕もちょっと発想は違うんですけども。

ただ、働いていてとか、世代間のギャップがとかって、全部本当のことなんですけれども、現在はそのところを根本的にもう一度見直さないといけないというところが、論点としては重要なんじゃないかと思うんですよ。特に都会における地域性というのは今すごく問われているところだというふうに思うので。いきなり明日から何かお祭りをつくってわっと派手になるなんてことはないんですけども、あいさつしましようぐらいのことでいいんですけどね。何かそういう、あ、ここに暮らしているんだということが、もう一つ具体的に見えてくる。なにか漠然と杉並区というだけではちょっと広過ぎるので、やっぱり地域というのはすごく重要なポイントではないかというふうに思います。

ただ、いきなり何かをやるというのは大変なんだけど、でもやっぱりうまくいっていることをみんなに知らせるということはあるんですよ。みんなで見に行ったりして、おもしろそうだなとかいうこととか。

○副部会長 はい。

それでは、そろそろ時間が近づいてきましたので、一つ目の議題と二つ目の議題を少しここで区切らせていただきたいと思います。

2番目の議題に関しましては、そんなにきれいに結論が出ているわけではないんですけども、何か大きな支援センターをつくるというよりは、本当に顔を見合わせるような感じのネットワークをつくっていく。今、町内会を軸にしてという話もあって、あるいはその難しさ、世代間の難しさということもあったんですけども、子育て・子育て支援をきっかけにしながら、ある意味では、うまくいけばですけど、新しい地域づくりもここから芽生えていくというふうに考えれば、むげに、今は難しいからやめようじゃなくて、少しインフォーマルな中で少しずつつくり上げていくという方向性も考えられたらいいなというふうに思いました。

そういう意味では、年配の人も子育て支援で、若い人から学ぶとか、子どもから学ぶという視点をそこで培っていく必要があるんじゃないかなというふうに思いました。私も頑固者なんで、若い人から学ぶというより、すぐ説教しちゃうんですが、子育て支援、子育てというのは、単に年長者が若い人たちを育てるという一方通行ではない関係がうまくつくれたらいいなと、今の議論を聞いて思いました。

さて、部会長、何か、今まで出たものを、またホワイトボードをもとに。

○部会長 いえ、これはちょっと、メモだけですから。これをもうちょっと、さっきの出されたものの中に落とし込んだり、言葉をもう一回点検したりというのは、この次の課題になるのかなと思いますけどね。皆さんで。今日、特に今、ここで何かが出るということには、なかなかならなくて、すみません。

○副部会長 はい。

それでは、今日は、資料1の空白の部分というのも少しずつ埋められるような論点が出てきましたので、部会長や私などももう一度整理をしながら、また事務局と相談しながらまとめていきたいと思えます。もう少し時間がありましたら、学齢期以降のことの積み残しもあったり、さらには一番上のスローガンと申しますか、その部分の方向性も議論したいと思いましたが、少し

時間になってきましたので、次回の部会の際にまた意見交換をして、整理していきたいと思います。よろしいでしょうか。

○部会長 一つ。学齢期以降にもつながっていくんですけど、この右側の一番下にある無気力な子、ニートの問題というのはずっと何回か問題になってきて、矢印で若者の自立とあるんだけど、ここも、ちょっと何をどう手だてができるのかというの、言葉をもうちょっと、これも必要かなと思うので、また次回の議論にしていいただければと思います。

○副部会長 そうですね。あとは、今日の議題でも、障害を持つ子どもへの支援とか、要保護・要支援児童対策という議題もほとんど出てきませんでした。他方で、ワークライフバランスや男女共同参画という視点は出たのかなと思います。文化の問題も、引き続き議論したいと思います。宿題ばかりですけど、ぜひ、次回までに少しまた考えてきていただければと思います。

それでは、次回ですが、今回は団体からの意見それから区民意見交換会での意見を紹介して、改めて私たち委員の意見を伺った上で、部会の議論のまとめに入っていくということになります。よろしいでしょうか。まだ議論が足りないから、もう一回ぐらい臨時にとかいう意見は出てくるかもしれませんが、私は楽天的に考えていて、今日のいろんな意見は、多様ではありますけど一つの方向性も出てきていると思いますので、今回は6月21日の夜18時からということですが、最後のまとめの部会にしたいと思います。

○委員 次回の冒頭で、区の文化施策についての資料などもお願いして、多少その辺の議論のまとめについての材料を提供させていただきたいと思いますので、よろしくをお願いします。

○副部会長 文化に関してということですね。では、次回の冒頭に、〇〇委員から文化に関するまとめの提案をしていただこうと思います。

それでは、事務局から何かございますでしょうか。

○企画課長 今、次回に向けてのお話をいただきましたが、次回に向けて、事前に各委員さんの方から、少し言い足りなかった部分、あるいはまとめに向けて少しこういったことを盛り込んでどうかということがあれば、ぜひメール等で意見をいただいて、それらを含めて正副部会長の調整に臨ませていただければ

ばというふうに思いますけれども、いかがでしょうか。

○副部会長 はい。ありがとうございます。前もってメール等で意見を出しておいていただけますと、まとめもしやすくなるということですので、ぜひご協力をお願いしたいと思います。

それでは、以上で本日の部会を終了いたします。どうもお疲れさまでした。